

うた時計^{どけい}

新美南吉

二月のある日、野中^{のなか}のさびしい道を、十二、三の少年と、皮のかばんをかかえた三十四、五の男の人が、同じ方へ歩いていった。風が少しもない暖かい日で、もう霜^{しも}がとけて道はぬれていた。

かれ草にかげを落して遊んでいる鳥^{からす}が、二人のすがたにおどろいて、土手に向こうにこえるとき、黒いせなかがきらりと陽の光を
はんしゃするのであった。

「坊^{ぼう}、一人でどこへ行くんだ」

男の人が少年に話しかけた。

少年はポケットにつつこんでいた手を、そのまま二、三度、前後にゆすり、人なつこいえみをうかべた。

「町だよ」

これは、へんにはずかしがったり、いやに人をおそれたりしない、すなおな子どもなどと、男の人は思ったようだった。

そこで二人は、話しはじめた。

「坊、なんて名だ」

「れんていうんだ」

「れん？ れん平か」

「ううん」

と、少年は首をよこにふった。

「じゃ、れん一か」

「そうじゃないよ、おじさん。ただね、れんていうのさ」

「ふうん。どういう字書くんか。聯隊れんたいの聯か」

「ちがう。てんをうって、一を書いて、ノを書いて、二つてんをうって……」

「むつかしいな。おじさんはあまりむつかしい字は知らんよ」

少年はそこで、地べたに木ぎれで「廉」と大きく書いて見せた。

「ふうん、むつかしい字だな、やっぱり」

二人はまた歩き出した。

「これね、おじさん、清廉潔白せいれんけつぱくの廉れん字じだよ」

「なんだい、そのセイレンケツパクてのは」

「清廉潔白というのは、何にもわるいことをしないので、神様の前へ出ても、じゅんさにつかまっても平気だということだよ。」

「ふうん、じゅんさにつかまってもな」

「おじさん、聯隊れんたいにいたの」

「うん、ずっと前にいたよ」

「しょうしゅう来ないの」

「ああ、よそへ行っておったもんだから」

「どこ」

「聯隊みたいなところだよ」

そういって男の人はにやりと笑った。

「おじさんのオーバのポケット大きいね」

「うん、そりゃ、大人のオーバは大きいから、ポケットも大きいさ」

「あったかい？」

「ポケットの中かい？ そりゃあったかいよ。ぽこぽこだよ。こたつがはいつているようなんだ」

「僕、手を入れてもいい？」

「へんなことをいう小僧だな」

男の人は笑いだした。でも、こういう少年がいるものだ。近づきになると、あいてのからだにさわったり、ポケットに手を入れたりしないと、しょうちができぬという、ふうがわりな、人なつこい少年が。

「入れたっていいよ」

少年は、男の人の外套のポケットに手を入れた。

「なんだ、ちっともあったかくないね」

「はッは、そうかい」

「僕たちの先生のポケットは、もっとぬくいよ。朝僕たちは学校へ行く時、かわりばんこに先生のポケットに手を入れてゆくんだ。

木山先生きやまというのさ」

「そうかい」

「おじさんのポケット、なんだかかたい冷たいものがはいつてるね。これ何？」

「なんだと思う」

「かねでできてるね……大きいね……何かね、みたいなもんがついてるね」

するとふいに、男の人のポケットから、美しい音楽が流れ出したので、二人はびっくりした。男の人はあわててポケットを上からおさえた。しかし音楽はとまらなかった。それから男の人はあたりを見まわして、少年のほかには誰も人がいないことを知ると、ほっとしたようすであった。天国で小鳥が歌ってでもいるような美しい音楽は、まだつづいていた。

「おじさん、わかった、これ時計だろう」

「うん、オルゴールってやつさ。お前がね、じをさわったもんだから、歌い出したんだよ」

「僕、この音楽、だいすきさ」

「そうかい、お前もこの音楽知ってるのかい」

「うん。おじさん、これ、ポケットから出してもいい？」

「出さなくってもいいよ」

すると音楽は終わってしまった。

「おじさん、もう一ぺん鳴らしてもいい？」

「うん、だアれも聞いてやしないだろうな」

「どうしておじさん、そんなにきよろきよろしてるの」

「だって、誰か聞いていたら、おかしく思うだろう。大人がこんな子供のおもちゃを鳴らしては」

「そうね」

そこで、また男の人のポケットが歌いはじめた。

二人はしばらくその音をききながら、だまって歩いた。

「おじさん、こんな物を、いつも持って歩いているの」

「うん、おかしいかい」

「おかしいなア」

「どうして」

「僕がよく遊びにゆく、薬屋のおじさんの家にも、うた時計があるけどね、大事にして、店のちんれつだなのの中に入れてあるよ」

「なんだ、坊、あの薬屋へ、よく遊びに行くのか」

「うん、よく行くよ、僕のうちのしんるいだもん。おじさんも知ってるの」

「うん……ちよつと、おじさんも知っている」

「あの薬屋のおじさんはね、そのうた時計をととても大事にしているね、僕たち子供になかなかさわらせてくれないよ……あれッ、またとまっちゃった。もういつペン鳴らしてもいい？」

「きりがないじゃないか」

「もう一ぺんきり。ね、おじさんいいだろ、ね、ね。あ、鳴り出しちゃった」

「こいつ、じぶんで鳴らしといて、あんなことやってやがる。ずるいぞオ」

「僕、知らないよ。手がちょっときわつたら、鳴り出したんだもん」

「あんなこといってやがる。そいで坊は、その薬屋へよく行くのか」

「うん、じき近くだからよく行くよ。僕、そのおじさんと仲よしなんだ。おじさんはね、日露戦争の勇士だよ。左のうでにたまのあとがあるんだ」

「ふうん」

「でも、日露戦争の話、なかなかきかしてくれないよ」

「そうかい」

「ロシヤがね、機関銃を使ったんだって」

「そうかい」

「おじさんはね、一ぺん死んじゃったんだって、そして気がついたらロシヤ軍のまん中にいたんで、それから夢中で逃げ出したんだ

って」

「ふうん」

「でも、なツかなかその話きかしてくれないんだ。うた時計は、がいせんしてかえるときにね、大阪で買って来たんだって」
「ふうん」

「でも、なツかなか、うた時計を鳴らしてくれないんだ。うた時計が鳴るとね、おじさんはさびしい顔をするよ」
「どうして？」

「おじさんはね、うた時計をきくとね、どういうわけか周作さんのことをおもい出すんだって」

「えッ……ふうん」

「周作って、おじさんの子供なんだよ。不良少年になってね、学校がすむとどっかへ行っちゃったって。もうずいぶん前のことだよ」

「その薬屋のおじさんは、その周作……とかいう息むすこのことを何とかいってるかい」

「ばかなやつだって、いってるよ」

「そうかい。そうだなア、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまったな。坊、もう一どだけ鳴らしてもいいよ」

「ほんとう？……ああ、いい音だなア。ぼくの妹のアキコがね、とつてもうた時計がすきでね、死ぬまえに、もう一ぺんあれをきかしてくれって、泣いてぐずったのでね、薬屋のおじさんそこから借りて来てきかしてやったよ」

「……死んじゃったのかい」

「うん、おとしのお祭の前にね。やぶの中のおじいさんのそばにお墓があるよ。川原かわらからおとうさんがこのくらの円まるい石を拾って来て立てである、それがアキコのお墓さ、まだ子供だもんね。そいでね、命日に、僕がまた薬屋からうた時計を借りて来て、やぶの中で鳴らして、アキコにきかしてやったよ。やぶの中で鳴らすと、すずしいような声だよ」

「うん……」

二人は大きな池のはたに出た。向こう岸の近くに黒く二、三羽ぼの水鳥がうかんでいるのが見えた。それを見ると少年は、男の人のポケットから手をぬいて、両手をうちあわせながら歌った。

「ひいよめ、

ひよめ、

だんご、やアるに

くウぐウれッ」

少年の歌うのを聞いて、男の人がいった。

「今でも、その歌をうたうのかい」

「うん、おじさんも知っているの」

「おじさんも、子供のじぶん、そういって、ひよめにからかったものさ」

「おじさんも小さい時、よくこの道をかよったの」

「うん、町の高等科へかよったもんさ」

「おじさん、またかえってくる？」

「うん……どうかわからん」

道が二つにわかれているところに来た。

「坊はどっちイいくんだ」

「こっち」

「そうか、じゃ、さいなら」

「さいなら」

少年は一人になると、じぶんのポケットに手をつっこんで、ぴよこんぴよこんと跳ねながら行った。

「坊ウ……ちょっと待てよオ」

遠くから男の人が呼んだ。少年はけろんと立ちどまってそっちを見たが、男の人がしきりに手をふっているの、またもどって行った。

「ちょっとな、坊」

男の人は、少年がそばに来ると、少しきまりのわるいような顔をしていった。

「実はな、坊、おじさんは昨夜その薬屋ゆうべの家でとめてもらったのさ。ところが今朝出る時あわてたもんだから、まちがえて薬屋の時計を持って来てしまったんだ」

「……………」

「坊、すまんけど、この時計とそれから、こいつも（と外套の内かくしから小さい懐中時計をひっぱり出して）まちがえて持って来ちまったから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろ」

「うん」

少年はうた時計と懐中時計を両手にうけとった。

「じゃ、薬屋のおじさんによろしくいってくれよ。さいなら」

「さいなら」

「坊、何て名だったっけ」

「清廉潔白の廉だよ」

「うん、それだ、坊はその清廉……何だっけな」

「潔白だよ」

「うん、潔白、それだけでなくちやいかんぞ。そういうりっぱな正直な大人になれよ。じゃ、ほんとにさいなら」

「さいなら」

少年は、両手に時計を持ったまま、男の人を見送っていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稲積いなづみの向こうに見えなくなってしまう。少年はてくてくと歩き出した。歩きながら、何かふに落ちないものがあるように、ちよつと首をかしげた。

まもなく少年のうしろから自転車が一だい追っかけて来た。

「あッ、薬屋のおじさん」

「おう、廉坊、お前か」

えりまきであごをうずめた、年よりのおじさんは自転車から下りた。そしてしばらくの間咳せのためものが言えなかった。その咳は、冬の夜枯木かれきのうれをならす風の音のように、ひゅうひゅういった。

「廉坊、お前は村から、ここまで来たのか」

「うん」

「そいじゃ、今しがた村から誰か男の人が出て来るのと、いっしょにならなかったか」

「いっしょだったよ」

「あッ、そ、その時計、お前は どうして……」

老人は、少年が手に持っているうた時計と懐中時計に眼をとめていった。

「その人がね、おじさんの家でまちがえて持って来たから、返してくれっていったんだよ」

「返してくれろって？」

「うん」

「そうか、あのばかめが」

「あれ、誰なの、おじさん」

「あれか」

そういつて老人はまた長く咳入った。

「あれは、うちの周作だ」

「えッ、ほんと？」

「昨日、十何年ぶりで、家へもどつて来たんだ。長い間わるいことばかりして来たけれど今度こそ改心してまじめに町の工場ではたらくことにしたから、といつてきたんで、一晩とめてやったのさ。そしたら、今朝、わしが知らんでいる間に、もう悪い手くせを出して、この二つの時計をくすねて出かけやがった。あのごくどうめが」

「おじさん、そいでもね、まちがえて持って来たんだってよ。ほんとにとつてゆくつもりじゃなかったんだよ。僕にね、人間は清廉潔白でなくちゃいけないっていつてたよ」

「そうかい。……そんなことを言っていたか」

少年は老人の手に二つの時計を渡した。うけとるとき老人の手はふるえて、うた時計のねじにふれた。すると時計はまた美しく歌い出した。

老人と、少年と、立てられた自転車か、広い枯野かれのの上にかげを落して、しばらく美しい音楽にきき入った。老人は眼になみだをうかべた。

少年は、老人から目をそらして、さっきの男の人がかくれていた遠くの稲積の方を眺めていた。

野のはてに白い雲がひとつ浮いていた。

底本…『日本児童文学大系 第二八巻 新美南吉集』（ほるぷ出版 一九七八年）

○新字、現代仮名遣いに改めました。

○他の定本と比較し、句読点を改めた箇所があります。